

祭りの舞台裏

羽計の道具作り

芸能に欠かせない道具。神幸祭では、どの地域も昔ながらの伝統を守り、前回の経験者や世話人などが、20年に一度の晴れ舞台に備え、旗や小道具を手作りしています。

芸能の練習や仕事で忙しい若手を裏で支えるのは、前回、前々回の神幸祭を経験した人たちです。



①慣れた手つきで縄をなう②傘回しの芸で使う傘に色を塗る。前回師匠が思いをつなぐ③勘定奉行が乗る馬につける鞍の手入れ④先箱も色を塗りなおし「鶴」「亀」を表す紫の飾りをつける⑤少年少女の弓隊が持つ弓矢を作る。色紙や竹などを工夫して丁寧な手作業で行われる⑥少年少女が持つ鉄砲を作る。20年前に使用した物を活用し色を塗り直して組み立てる。



大名行列を行う羽計区では、多数の特別な道具が必要です。練習に備えて、昨年11月27日に役員が集まり、時間をかけて道具の手入れをしました。すべてが昔ながらの手作業。演者が使いやすいように考えながら道具が整えられました。丁寧に保存してあった20年前の道具たちがお色直しされ、再び輝きを取り戻しました。

大名行列を行う羽計区では、多数の特別な道具が必要です。練習に備えて、昨年11月27日に役員が集まり、時間をかけて道具の手入れをしました。すべてが昔ながらの手作業。演者が使いやすいように考えながら道具が整えられました。丁寧に保存してあった20年前の道具たちがお色直しされ、再び輝きを取り戻しました。



平成21年11月27日 羽計青年館には、貴重な道具がずらりと並んだ

使者・使者受け合同練習



地域の声・取材の目

20年に一度のお祭り。20年ぶりに復活する伝統芸。伝統を受け継ぐ地域は、実施に至るまでは紆余曲折。練習が始まってからもさまざまな問題があるようでした。しかし、このいろいろと生じる課題こそ、薄れつつある地域コミュニティを深めていくように感じました。

取材をする中で、どの地域にも共通していたのは、人口減少による人手不足と景気低迷による資金不足に悩む声でした。

また、時代の流れとともに働き方やライフスタイルが変わり、以前とは様子が変わったということも多く聞きました。地域をあげての行事といえども、勤務先の休みが取れない。行事に対して社会的な協力が得られにくくなった。時間に余裕がない。交通に関する手続きが複雑になった。行事に対する公的な支援はないのか……などです。

このよう中で、無心に頑張っていたのは、若者や他の地域から嫁いできた人たちです。初めて経験する行事を楽しみ、地域のスタイルを受け入れようとして、必死に汗を流していました。当初恥ずかしそうに丸めていた背中がだんだんと自信に満ち、3月末には「やるしかない」と背筋が伸びていました。練習の雰囲気も徐々に明るくなり、地域に新しい力が満ちていくのを感じました。

皆でやり遂げた一大行事は里の力を強めたに違いありません。この力は、未来への課題を解決し、地域のスタイルと感動をつなげるはずですよ。ぜひ、この姿を多くの人に見てほしいと思います。